

## 留学、あるいは旅と人と本のすすめ

看護とグローバルヘルス（カナダ短期留学）

科目責任者 松下博宣

常々、人は「旅と人と本」との邂逅によって深く自身を鍛錬し成長することができる、と思っている。結論から言うと、旅と人と本が凝縮されたものが留学だ。だから留学することによって、人はそれぞれの器量に応じて、本当に価値あるものと出会い、成長することができる。

20歳代の頃、奨学金を得て米国に留学し、時に悪戦苦闘しながら、多くの人々に助けられて、学位以上の様々なものを吸収し得た自分の経験に照らし合わせても、そう自信を持って言うことができる。

留学は「旅」である。習慣も文化も異なるまったく見ず知らずの異界に込むことによって、素の自分に否応なく直面することになる。すると素の自分の奥底には日本語や日本文化が横たわっているということを知る。つまり、外国を旅することによって、同質的な日本で生活するだけでは決して得られない「相対化」による気づきを得ることができるのだ。日本を離れ、異国の地に飛び込み、いろいろな気づきを得て、日本に還って来る。この旅の過程で五感を総動員して体得する学びは実に大きいものだ。

留学は「人」との出逢いに満ちている。旅先ではトラブルの連続だ。言葉もうまく通じない。習慣も異なる。社会システムも違う。そんな日々直面する異質との遭遇で頼りになるのは、自分とまわりの人々だ。多くのトラブルを周りの人々の助けを借りながら対処することにより実り多いトラベルとなる。だから、いろいろ工夫をしてその土地に溶け込むほどに、友人や親友がたくさんできる。そうして、価値観や発想が異なる「人」から人は多くを学ぶのだ。ホームステイ先の両親、大学の友人、教員はおろか、街やバスの中でたまたま声を掛け合った人たちこそ、学びの宝庫だ。

留学は「本」との出逢いでもある。もちろん臨床英語の授業では英語圏の人々のために書かれた非常に知的なテキストブックを使う。できれば留学前に、専門書を離れ、英語圏の生活、文化、歴史、民俗、地理、キリスト教、民主主義の成立、医療制度などに関する初学者用の本を読んでおくとよい。読書によって得た知識が必ず留学でも役立つし、帰国してから、継続的にそれらの本に触れ教養を涵養すべきだ。国際的にも通用するような高い専門性の土台となるものが、国際的な幅広い教養だ。実務の世界でも研究の世界でも、国際的に活躍している人ほど、国際的で広範な教養を読書によって身に着けているものだ。

要するに「旅と人と本」に遭遇することで、人は本当の勉強をして成長する。今風の言い方をすれば、「旅と人と本」との出会いが豊かな経験学習の土壌を創る。もちろん、日本という環境での国内の「旅」、日本「人」、日本語で書かれた「本」との遭遇も素晴らしいものではある。しかし、長い人生、なるべく若い時代に、日本を飛び出して上記のような

海外経験を培うことを勧めたい。海外経験を積み重ねれば積むほど内省を深め物事を相対化する契機が増えるので、日本に対する探究心も研ぎ澄まされ理解も深まるというものだ。そうすることによって体得されるいろいろな知識を駆使して、自分の頭で考え、涵養されるもののことをグローバル・リテラシーと呼ぶ。

グローバル・リテラシーは、世界各地の文化のコアに肉迫することに始まり、その上で自分なりの世界観と人生観を鍛錬することに達する。世界の在り方（世界観）や自分の生き方（人生観）を深めることにより、そうしたものを外国語で異文化の人たちと自由闊達に共有することによって、グローバル社会でも臆することなく活躍することができるようになる。そのような稀有にして確実な端緒になり得るのが、留学であり、「旅と人と本」との遭遇だと思われる。